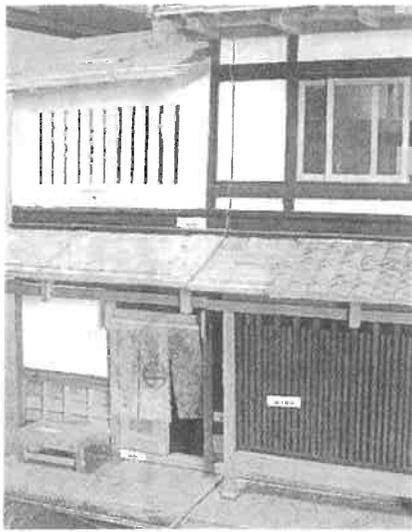


時を超え素材と技融合

京都市(京町家の保存・新築)

木造2階建て、築約1000年。紅殻塗りの木の格子戸を開けると、細長い土間が続く。狭い間口に比べ奥行きが深い。その先には小さな庭。土間を風が通り抜ける――。

「京町家」。古都・京都を象徴する伝統的な家屋だ。木や土など自然素材でつくられた家には、京都の夏の蒸し暑さを和らげる工夫がある。



精巧に再現された京町家の模型。構造を理解できるように右の一部分だけ瓦をふいている＝京都市右京区のアラキ工務店

家。アシを編んだ葺戸は風通しが増し、「夏、家に帰るとヒヤッとする」。打ち水をすれば、奥の庭から風を呼び込める。1級建築士の松井薫さん(59)が梅雨に湿度を測ったら外は80～100%でも、中は70%前後だったという。

環境モデル都市に選ばれた京都市は、温室効果ガスの削減を先進国に義務づけた「京都議定書」誕生の地。「カーボン(炭素)・ゼロ」に挑む取り組みのひとつが、「景観とマッチした省エネ建築物の普及」、つまり京町家の保存・再生と新築の事業化だ。

しかし、京町家にも難点がある。京町家の住民約6千人に「住み続けるうえでの問題

モデル都市

点」を尋ねたアンケートでは、1775通の回答のうち最も多かったのが「耐震・防火」。6割近くを占めた。京町家が建てられたのは耐震や耐火の基準を定めた1950年の建築基準法施行以前だ。

市と地元工務店などは、防火戸を使い、壁や柱の配置を工夫した「平成の京町家」の開発を計画。夏をしのぎやすい特徴を生かしつつ壁や床に断熱機能を備え、太陽熱や地下水の活用も検討している。

「維持・改修費」も課題だ。家に合わせた部材を用意しなければならず、コストがかかるという。

立命館大のグループは05年の土地利用現況調査をもとに市内の京町家を約5万軒と推定している。だが、次々とマンションに姿を変えていく。

市は08年10月から、初の全数調査を進めている。門川大作市長は「京町家に代表される暮らしの知恵や匠の技を生かし、環境負荷の少ない社会のモデルを作っていきたい」と語る。

京町家の外観維持・復元工

京町家の外観維持・復元工

京町家の外観維持・復元工

(石橋達平)